

石郡英一の

“老話”

介護職に聞いてほしい
高齢者と家族の物語

第3話

イ エ ラ イ シ ャ ン
夜来香①

いしこおり・えいいち

日本福祉介護総研株式会社代表取締役会長。医療・介護運営教育コンサルタント。看護師／救急救命士。学校法人美芸学園理事。病棟看護長、老健管理部長、身体障害者療護施設事務長を経て、介護保険施設などの運営教育コンサルタントを行う会社を設立。役者かと思うほどの演技とユーモア、現場の方が、思わずうなずいてしまう体験を豊富に持っている人気の講師。主な著書に『介護現場の困ったスタッフを戦力に変える指導法』『医療依存度の高い高齢者のケア』『身体機能の低下した重度利用者のケア』『石郡流 施設看護師のデキる仕事術』（いずれも日経研出版）がある。

1. 希望

〈1〉

中秋の満月が望める晴れた夜、頼子が夕食の片付けを終えると、時計の針は20時20分を指していた。

信州小布施の夜は、悠久の大自然に闇が広がり星の瞬きと調和する。カーテンを開けると、庭につながる南に向く窓からは、1等星を含むわし座のほかに3等星以下で構成される山羊座や水瓶座まで見ることができた。「誠治さん、見て！ きれいな星空…。何て素敵なところかしら…。私、ここに来てよかった」そう言うと頼子は、おもむろ

に窓を開け庭先に出て大きく息を吸い込んだ。

「あれっ?! よい香り…何の香りだろう?」

頼子が独り言のようにつぶやくと、誠治が応えた。

「^{イェライシヤン}夜来香だよ。夜に来る香りと書き、読んで字の如く、20時頃から強く香るようになる花で、その甘い香りからナイトジャスミンとも呼ばれているよ。僕が東京で買って来たのさ。また夜来香は、和名を^{トシキキカサ}東京葛とって、ガガイモ科テロスマ属の常緑つる性低木で、黄色い花を咲かせるんだ」

「随分と詳しいのね。ところで夜来香って、李香蘭の歌った夜来香?」

「そう、あの夜来香。でも李香蘭とは古いね。せめてテレサテンの夜来香と言ってほしかったな。まあ、どちらでもよいんだけどね。夜来香という曲は、闇の中から香る夜来香の様を、情緒^{てんめん}纏綿とした甘い香りの恋心に見立てて歌った曲だったね」

「誠治さん、この花が好きなの?」

「好きだね」

「どんなところが?」

「何となく…」

「適当ね…」

頼子は笑った。笑ってすぐに、夕食時に乾杯したワインのほろ酔いも手伝い、頼子は誠治に^{あま}甘絡み^{がら}した。

「この香りは女性の色香を彷彿させるものよね…。こんな花が好きだなんて初めて聞いたわ。

それに随分と詳しいのね…。誠治さんにも昔、夜来香のように甘い香りの、恋心を彷彿させる彼女がいたんじゃないの?」

「おいおい、いい年をして絡むなよ。僕が好きなのは夜来香の持つ生命力だよ」

「生命力? ……何それ?」

「ゲーテだったかなあ? ……忘れたけど、ある詩人がこう言ったんだ。“日はまだ高い。しかし急がねばならぬ”ってね。人の寿命を80年としてね。一生を1日に例えて、0時に生まれて24時に亡くなるとすると、正午の太陽が40歳、24時の太陽が80歳となるよね。これを細かく考えると、1歳が18分ということになる。そうすると、朝5時の日の出の太陽は17歳、日が沈む18時の太陽が60歳ということになる。今年60歳になった僕たちは、まさに太陽が沈んだ18時に当たるというわけさ。きつと先ほど話した詩人は、今は若くても、日が沈むようにあっという間に歳を取るから、急いで自分の天命をやり遂げなければならない、と考えたのだろうね。でも、今は昔より寿命が延びて、太陽が沈んでも人生は終わらない。つまり、社会での輝きがなくなっても人生は終わらなくなったということさ。20時頃から強く香る夜来香は、24時間の人生に例えると、67歳になって香りはじめるということになる。どうだい、僕たちも社会の一線は退いたけれども、夜来香のよ

うに、老いてなお、強く香るような魅力ある人間になりたいと思わないかい？」

「すごく理路整然と創り込まれた話ね。さっき“何となく好き”なんて言っていたけど、全然“何となく”じゃないじゃない。でもその話は素敵な話ね…。誠治さんが創ったの？」

「ああ、いろいろなことを熟考しているうちに考えついたんだ……。この1年、頼子が僕のわがままを聞き入れてくれてから、休みのたびにこの地を訪れ、生活できるようにこの家を整えてきたよね。でも実は、僕があれほど願った小布施での暮らしだったけど、時間が経つにつれて不安も出てきてね。ここでの暮らしに夢を馳せる自分と、高齢になってからの田舎暮らしで、2人は幸せになれるのだろうかど不安を抱く自分が、心の中で同居するようになったんだ。

小布施に来ようと決めてから随分と経つのに、ここに引っ越してくる数日前まで、希望と不安のアンビバレンツに苛まれていた。でも、ここに来るつい1週間前に腹が据わったんだよ。

ほら、ちょうど1週間前、職場の皆が僕のために送別会を開いてくれたじゃない、あの夜だよ。あの夜、送別会を終え駅から歩いて帰る途中、どこからともなく甘い香りが漂ってきてね。その香りはすぐに夜来香だと分かったよ。10年前に会社の職員旅行で行った中国の深圳

で嗅いだ印象的な香りだったからね。その時の深圳は夜祭りの最中で、とても活気があってね。生きていると実感できる夜だった。その活気づく街に夜来香の香りが交じり合って、夜来香の香りがそのまま人の持つ生命力のように感じられたことを覚えているよ。その感情が、忘年会の帰り道で夜来香の香りを嗅いだ時に蘇ってきてね。なぜだか腹の底から“一度きりの人生を悔いなく生きる”と勇気が湧いてきて、小布施での暮らしに対する不安が消えたんだ。

その時ふと、夜香る夜来香の様と、年を取ってから小布施で香りたいと願う僕らの姿が重なり合って、先ほどの話が閃いたんだ。さっき頼子が質問した時は、取ってつけたような話だと思ひ“何となく”って答えただけ、いざ口にしてみると、自分で言うのも何だけど、核心を衝いた話のような気がしてきたよ」
「そうだったの…。私は今とても幸せよ。これからこの地で、2人で力を合わせて、夜来香のように素敵な香りが放てるように頑張らましようね！ …あれ？ あなたの話を聞き入っていたら、初めに何を怒っていたのか忘れてしまったわ！ 何だったかなあ。…まあいいか！」

頼子はそう言って笑うと、闇に広がる満天の星空と夜来香の香りに包まれながら、全身で幸せを感じていた。

〈2〉

^{なるわ}成輪誠治と頼子は同い年で、結婚して今年で満40年となる。2人が東京にある自宅を売却し、長野県の小布施町に越してきてから5年経った。

誠治は大学を卒業後、大手食品会社に入社し、冷凍食品の開発部門で仕事をしてきた。頼子も大学を卒業後、同じ食品会社に誠治と同期入社し事務員として働いていた。同期の会でよく顔を合わせた2人は、趣味の園芸で意気投合し、次第に恋愛に発展して結婚に至った。

誠治が40歳になった時、会社から新商品開発の食材探しの出張で小布施行きを命じられた。この時誠治は、自然豊かな小布施の地の素晴らしさに魅了され、それ以来、将来機会があれば小布施でのスローライフを望むようになった。

誠治は60歳の定年を迎える2年前より、小布施での暮らしを強く願うようになり、頼子に対して、事あるごとに小布施での永住を懇願し続けた。初めは不安を口にしていた頼子も、誠治の熱意に根負けし、誠治の定年をきっかけに小布施に移り住むことにしたのである。

2人には子どもがいなかった。また、2人は共に末っ子で、お互いの親が他界してからは、実家が熊本県の誠治と長崎県の頼子は、地元で暮らす年の離れた兄弟と疎遠で暮らしていた。それらのことに加えて、頼子が結

婚後専業主婦だったことなどから、誠治の定年で仕事の人間関係が希薄になると、世間との柵しがらみが薄い2人は、誰に遠慮することもなく住居を小布施に移すことができた。

小布施で暮らしはじめてからの誠治は、趣味の園芸が高じて農業の担い手をなくした地元住人の休耕地を借り受け、畑を耕し野菜を育て、半ば自給自足の生活を中心から楽しんでいった。頼子も誠治に寄り添い、充実した毎日を送っていた。

中でも誠治が毎年心待ちにしていたのが、9月の中旬、中秋の満月を望む頃に訪れる夜来香の開花である。誠治にとってこの時期は、大自然が織り成す奇跡のシンフォニーを、1年で最も感じることでできる季節だった。

闇に広がる満点の星空は、誠治の視覚を満たして心の惑いを拭い去り、秋風のささやきは触覚をくすぐり心地よさが体を包んだ。虫の音色は誠治の聴覚を震わせ心が踊り、小布施名産の栗の甘みは味覚を満たして体に溶け込んだ。そして、夜来香の芳香が誠治の嗅覚を刺激し息吹を喚起して心振るわせた。

そして廻ってきた5年目の秋も、夜来香が黄色い花を咲かせて芳香を放ち、明日が中秋という満月の明かりと混ざり合った。「よい香り…。今年も夜来香の季節が廻ってきたね…」

誠治が感慨深く語ると、頼子は急に吹き出した。

「どうしたんだい？ 急に笑い出して…」

「ここに越してきた5年前、初めて夜来香が咲いた日の夜を思い出していたの。私が夜来香にやきもちを焼いた夜のこと…」

「あ～、覚えているよ。君が絡んできた夜ね…」

「絡んだなんて心外だわ！ 可愛い乙女心よ」

頼子は無邪気に笑った。

2. 旅立ち

〈1〉

「頼子。午前中畑を見ていたら、薩摩芋の葉が少なくなったし、葉色の一部が枯れてきたので、午後から薩摩芋を収穫しようか？」

「いいわね。今日はちょうど中秋の名月だというから、薩摩芋で白玉団子を作るわ！」

「それは楽しみだ」

家にお昼ご飯を食べに帰った2人は、昼から薩摩芋を収穫すると決め、昼食を終えると畑に向かうため、誠治の運転するワンボックスタイプのライトバンに乗り込んだ。

中秋といっても日差しはきつく、乗り込んだ時の車内はサウナ状態となっていた。

「残暑が厳しいぞんしょ！」

誠治はそう言うと、エンジンをかけ、エアコンを最低の18度に設定した。

「ひどい親父ギャグね。今の若い子には全く意味不明よ！」

「そうかなあ～？ 頼子はセン

スがないんじゃない？ 僕のセンスを分けてあげるよ！」

そう言って誠治は、運転席に置いてあった扇子を広げ、左手で頼子に向かって大仰に扇いでみせた。

誠治の駄洒落は、心身のストレスを感じる時、無意識に繰り出される。頼子はそれを誠治の優しさだととらえていた。今日もうだるような暑さに、頼子がストレスを感じないようにとの気配りに感じられた。

「センスがない？ けなすのではなく、うちは仰いでほしいわ」

「何それ！ めちゃくちゃ洒落が利いているね！ 素晴らしい返しだよ！ クーラ～と来た！」

「しゃあないわね～！ 誠治さん、すぐ熱くなるから、少し冷やしてちょうだい！」

「今のも抜群にうまい！ いや参りました！ このセンスは頼子のものです」

そう言って誠治は扇子を頼子に渡した。

「じゃあ、私のセンスを分けてあげるわ」

頼子は扇子を受け取ると、勝ち誇ったように胸を張り、誠治に向かって扇子を扇いだ。

“誠治さん、ありがとう”

何げない戯言のやり合いに、頼子はこの上ない幸せを感じていた。

〈2〉

「頼子！ 思ったとおりだ！ 丸々とした薩摩芋だよ！」

誠治が歓喜の声を上げた。誠

治に背中を向けて作業を開始した頼子は、その声を受け、薩摩芋の蔓をたどった。薩摩芋を掘り上げてみると、誠治の歓喜が実感できた。

「誠治さん！ こっちも素晴らしいわ！」

頼子もまた歓喜の声を上げ作業を続けた。

頼子がしばらく作業を続けていると、頼子の後ろで作業をしているはずの誠治の気配が感じられなくなったため、後ろを振り返るとそこに誠治の姿はなかった。咄嗟に頼子は車内での戯言が思い出され、誠治が芋の蔓に隠れて悪戯を仕掛けてきたのだと思った。

“仕方ないなあ…付き合ってあげるか…”

「九里より旨い十三里、旨さの違いは四里選り！」

頼子がおどけて誠治の下へたどり着くと、胸を押さえ、芋の蔓の中に埋もれて、くの字になって倒れ込んでいる誠治の姿があった。

「誠治さん！ ふざけないでよ！」

頼子は誠治の体を揺するが、誠治から反応はなかった。頼子はすぐに、誠治の持病である狭心症のことを思い出した。

「胸が痛いの?! 大変！ 薬は？」

誠治に問いかけるが返事がなかった。色をなくした誠治の顔が事の重大さを現していた。

「えっ！ どうしよう?! 今すぐ救急車を呼ぶからね！」

誠治にそう告げると、頼子はポケットから携帯電話を取り出し、慌てて救急のダイヤルを押した。頼子の携帯電話のデジタル時計は13時50分を表示していた。

「もしもし！」

「こちら須崎市消防署です。火事ですか、救急ですか？」

「えっ?! 火事ではありません！ 夫が倒れたんです！」

「落ち着いてください」

「はい！ 分かりました。落ち着くんですね！」

「場所はどちらですか？」

「はい！ えっ?! この住所ですか?! ここは畑なのですが…。小布施町の公民館の北1 km先の薩摩芋畑です」

「どのような状況ですか？」

「はい？」

「ご主人の倒れた状況をお教えてください」

「薩摩芋を収穫している最中に胸を押さえて倒れたのです」

「心臓に耳を当ててみてください。心臓の音が聴こえますか？」

「心臓ですか？ えっ！ 聴こえません……………」

頼子は気が動転しながらも、消防との対応は辛うじて受け答えができた。

消防隊に連絡後、間もなくして誠治のもとへ救急車が訪れた。誠治と頼子は、救急隊によって、最寄りの新生会病院という救急病院へと搬送されたが、その間も頼子は気が動転したままでいた。



頼子がようやく気を取り戻したのは、搬送された救急病院で、看護師より処置室前で待機するよう指示され、処置室前の長いすに腰かけている時だった。長いすで待つ時間は、頼子にとって5分が1時間にも感じられるほど長かった。

「神様、仏様、誠治さんをどうか助けてください。お願いします。どうか助けてください……………」

頼子はただただ誠治の無事を祈った。

処置室の喧騒が次第に静寂へと変わると、中から看護師が出てきて、頼子を処置室に招き入れた。処置室のベッドの上では静かに誠治が横たわっていた。頼子が処置室に入って、看護師の誘導に従い誠治のベッドサイドに立つと、おもむろに医師がペンライトで誠治の瞳孔反射を確認した後、腕時計を見て口を開いた。

「14時52分。…ご臨終です」

それを受け、看護師が言葉を添えた。

「ご愁傷さまでした。お力落としのございましたら…」

医師と看護師が黙礼をし、し

ばしの間席を外すと、頼子は何が起こったのか気持ちの整理がつかぬまま茫然自失となり、その場で立ちすくんだ。

その後しばらくすると、誠治の遺体は看護師によってエンゼルケアと言われる死後の処置を施され、病院の地下に設けられた霊安室に運ばれた。霊安室でも頼子は、しばしの間一人にされ、誠治の亡骸なきがらと向かい合った。頼子はこの時初めて、静かに涙を流した。

どのくらい時間が経ったのか、時間の検討もつかぬまま、亡骸と過ごしていると、霊安室の扉をノックして、看護師が入ってきた。

「このたびはご愁傷さまでした。これからご遺体をどちらに移されますか？」

「まだ何も…」

「先ほど、身寄りがないとお聞きいたしました。もしご依頼があれば、病院が連携している斎場をご案内いたしますが、いかがなさいますか？」

「よろしく願います……」

看護師の質問に、頼子は消え入るような声で答えた。

その後しばらくすると、病院が手配した地元の斎場から派遣された葬祭従事者が霊柩車でやってきて、頼子の意向に基づき誠治の遺体を自宅へと運んだ。

自宅に戻った頼子は、葬祭従事者と通夜・葬儀・火葬などの打ち合わせを済ませると、誠治の兄姉や自分の兄姉に連絡を

取った。しかし、いずれも型どおりの弔辞を述べられた後、高齢で長旅ができないとの理由で、参列できないと返事をもらった。

結局頼子は、一人ぼっちで通夜を迎えることとなった。庭では、誠治の形見となった夜来香の花が強い香りを放っていた。

小布施に来て5年目の中秋。夜来香が咲いた翌日に、心筋梗塞によって誠治は突然の死を迎えた。

“誠治さん……。この先、私一人ですればいいのか……？”

3. 自立

<1>

「……まだ寂しさが残る毎日ですが、くよくよしてみえますと、今は亡きご主人も悲しまれると思いますよ。元気を出してくださいね。それではこれで失礼いたします」

1年目の周忌のため頼子宅を訪れた住職が、読経、説法と終えた後、会釈して帰路についた。誠治が亡くなってから1年目の秋だった。

誠治がいなくなってからの頼子は、一人住まいの年金暮らしという慎ましいもので、借り受けていた農地はすべて地主に返却し、ほとんど自宅に籠もり、ひっそりと暮らしていた。この1年間、頼子は生きる気力が出ないまま漫然と過ごし、誠治との思い出にふける毎日だった。

頼子にとって、誠治との思い出の象徴は夜来香だった。そこ

で頼子は、誠治の亡くなった後も、夜来香を誠治の形見として、冬は屋内で栽培するなどして大切に育てていた。今年は温かったせいか、8月の下旬に例年より早く夜来香の開花が訪れた。

「誠治さん、今年は例年より早く夜来香が咲いたわ。よい香りよ。確か夜来香を人間に例えると、67歳の時に香りを放つよね。私はあと1年で香る歳だけど、このような調子で香ることができるのかしら？」

頼子は静かに遺影に語りかけた。

10月の頭、頼子が自宅の庭の手入れをしていると、頼子の家の西側に建つ田中さん宅の庭で、見知らぬ高齢の男性が松の剪定を行っていた。

毎年この時期になると、田中さん自らが鋏を手にして、作業をしているはずなのに、頼子はその様子を怪訝に思っていると、それに気づいた男性が、天を仰いで汗を拭きながら、脚立から頼子を見下ろす格好で声をかけてきた。

「こんにちは。まだまだ暑いですねえ～」

男性の笑顔から人懐っこさが溢れた。その笑顔に惹かれるように、頼子は田中さん宅の塀に近づき、その男性に声をかけてみた。

「田中さんはどうなさったのですか？」

「私もよくは知らないのですが、どねえ…。うちの親方が言うに

は、重い病を患い、秋口から入院されてみえるそうですよ。田中さん、独り身でいらっしゃるんでしょ？ 入院中に依頼されるなんて、庭がよほど気になったのでしょうかねえ～」

男性は荒木と名乗り、田中さんの依頼でNPO法人の「高齢^{はたくり}働ら栗事業団」という団体から派遣されてきたという。

「ハタラクリ…?!」

「“働く”という言葉の語尾に、小布施名産の“栗”をかけた造語ですよ。事業団の内容は高齢者が集まって仕事をやる所です」

「へえ～」

頼子は、荒木の笑顔と優しく丁寧で軽快な語り口調に、いつの間にか引き込まれていった。

「よかったら、奥さんのお名前をお教えていただけませんか？」

「成輪頼子です」

「“なるわよりこ”さんとはどうお書きになるのですか？」

「成功の“成”という字に、輪ゴムの“輪”で“成輪”。頼子は頼りになる子、で頼子です」

「よい名前ですねえ。名前から読んで“頼りに成るわ”と読めるじゃないですか！」

「昔主人によく言われました。でも実際は、全然頼りにならないですけどね」

「いやいや、ご謙遜を……ところで、成輪さんはこちらの方ではありませんね。東京からお見えですか？」

「ええ…。昨年こちらに越してきました」

「やはりそうでしたか。言葉が違うなと感じたものですかから…」

「生まれは長崎県の佐世保ですけれどね」

「そうですか。今の時間お家にみえるということは、お仕事はなさっていないのですか？」

「現役は卒業しました。もう年金暮らしですよ」

「え～！ 本当ですか?! どう見ても40代にしか見えないですけどねえ～」

「あら！ 荒木さん、お上手ですね！」

「失礼ですが、お歳はおいくつでいらっしゃいますか？」

「66になります」

「66歳なら持って来いですよ！」

「持って来い？」

「私は今年70の古希ですが、うちの事業団の平均年齢は71歳ですよ。66歳なんてまだまだお若い。お見受けしたところ、お名前のおり頼りになりそうなので、うちの事業団に登録なさってはいかがですか？ うちの、いつでも自分の都合のつく時に働くことができますので、多くの方が生き甲斐と社会参加を兼ねて登録なさってみえますよ。成輪さんは、何か特技がおありですか？」

「できることといたら家事くらいで、特技なんてありません。頼りになるなんて名前負けていますよね…」

「いや！ そんなことはありません



せん。家事ができれば上等です。随分と役に立ちますよ！ ご主人さえよければ、うちでヘルパーでもなさったら？」

「主人は昨年他界しました。それに私、ヘルパー資格なんて持ち合わせていませんし…」

「それは失礼なことを申し上げました。お気の毒に…。でもそれなら、なおさら働いていた方が気も紛れるというものですよ…。」

実は私も、6年前まで家内と東京で暮らしていたのですが、6年前に家内を亡くしましてね。塞ぎ込んでいたら、3人の子どもたちが心配しまして…。特に8年前から転勤で長野にきていた長男が、“僕はしばらく長野にいることにしたから、僕の家近くに住んで、やることのないのなら、お父さんの好きな造園でもやって働いたら”と言って、ここの事業団をインターネットで検索してくれたのですよ。

そして6年前からこちらに移り住み、働きながら暮らしています。成輪さんもぜひなさってはいかがですか？ 人間は一人では生きられない。社会

が私たちの生きる場所なのです！うちの事業団はさまざまな職種を請け負っていますので、掃除や調理など、家事を活かせる仕事も数多くあると思いますよ」

頼子の境遇に共感するかのよ
うに、荒木は熱弁を振るった。「ありがとうございます。少し考えてみます」

境遇の似た荒木の親切な誘いは嬉しくもあったが、頼子はあまりの展開の速さに少し気が重くなった。荒木はそれを察知したのか、「あっ！少し待っていてください！今、お宅の玄関先に回りますから！」

荒木はそう言う、急いで脚立から降りた。「ちょっと…ちょっと…待ってください！」

頼子は荒木を止めようとするが、荒木には頼子の声が届かなかった。

すると直に、頼子の家の玄関にあるインターホンが鳴った。出てみると、荒木がビニールに入った新品のタオルを持って玄関先に立っていた。

「袖振り合うも多生の縁」と申します。お近づきの印としてこれを差し上げますので、ぜひお使いください。うちの事業団が、昨年10周年記念で作ったタオルです。在庫がたくさんありますので、遠慮なくお使いください。NPO法人高齢働ら栗事業団という文字と、栗をモチーフに

したマスコットのロゴマークが入っていますが、愛着を持っていただけると幸いです。それからこれも渡しておきますね。気が向いたらいつでもお電話ください」

そう言って荒木は、首にぶら下げていた名刺ホルダーに数枚入っている、顔写真入りの会員証兼名刺を1枚頼子に手渡した。そこには「NPO法人高齢働ら栗事業団 造園班 荒木英雄」と記されていた。

「いいんですか？ すみません。では遠慮なく頂戴いたします」

頼子がタオルと名刺を受け取ると、荒木は腕時計に目をやり、肩をすくめる仕草をした。

「おっと、もうこんな時間！早く仕上げないと“どこで油を売っていたのだ！”とまた親方から叱られる！奥さん、楽しい時間をありがとうございました！」

そう言うと荒木は足早に戻っていった。

仕事の話はさておき、気さく

な荒木との会話が弾み、頼子は久しぶりに楽しい気分となった。誠治との別れから1年、ブラインドを下ろしていた頼子の心に、荒木の誘いは希望の光をもたらした。

“家事ができれば…随分と役に立ちますよ！働いていた方が気も紛れるというものですよ…。人間は一人では生きられない。社会が私たちの生きる場所なのです！”

頼子は荒木と別れると、荒木の言葉を何度も何度も反芻した。

その夜、頼子は夜来香の香りを嗅いだ後、仏壇の前に座り、誠治の遺影に語りかけた。

「誠治さん、あの方夜来香だわ。香っていたもの…。誠治さんの言っていた生命力の香りが漂っていたわ。荒木さんの太陽は、70歳とおっしゃってみえたので、えっと…21時ね。何だか私も、もう一度社会で生きてみたくなってきたわ。ねえ、誠治さんどう思う？…やってみようかな…」(次号に続く)